

第三百七話 重慶爆撃：戦略爆撃の難しさ！

連合国（米国）が日本に対して行った所謂本土空襲は明らかな戦争法規違反であるが、それを日本が行った重慶爆撃に対する報復攻撃であるとして正当化する論が往々にしてみられる。また、重慶爆撃について、ゲルニカ爆撃にも匹敵する組織的・非人道的な無差別攻撃であり、日本の残虐さを示すものだとする論も根強い。重慶爆撃について簡単に状況をチェックしておきたい。

1 経緯

支那事変が中支に拡大した第二次上海事変の結果、国民政府は首都南京を放棄、漢口更に四川省の重慶に首都を移転した。（1937/11/20 宣布）

日本は陸路からの攻撃は戦力上困難と判断し断念、大本営は「航空進攻、航空撃滅戦」を決定した。（1938/12/2）所要の準備が整い視界の良好な 1939 年春頃から本格的に実施された。

当初は、大本営の指示に基づき、飛行場、軍事施設等を目標としていたが、重慶の気候は霧がちで曇天の日が多く、目視での精密爆撃が困難であった。住民混在の状況（住民を盾にした？）も多々あり、非戦闘員の被害が続出した。

大規模な絨毯爆撃が行われたのは、海軍主導で行われた第百一号作戦（1940/5/17～9/5）、第百二号作戦（1941/5～1941/8）であるとされる。

この絨毯爆撃を提唱したのは井上成美支那方面艦隊参謀長であり、参謀長は支那事変の早期終結を狙っていたという。一方、陸軍では、この絨毯爆撃に対して第三飛行団長の遠藤三郎少将（207 話 赤い将軍参照）が、重慶爆撃無用論（効果が少ない、非人道的・国際法違反）を上申している。

中国側資料によれば、重慶爆撃で 1939 年だけで 2.8 万人の犠牲者が出たとされる。



2 戦略爆撃とされるものの事例

(1) 日本軍の錦州爆撃(1931/10/8)、漢口爆撃(1939/10/3, 10/14)
戦略爆撃？

(2) 独軍のゲルニカ空爆（1937/4/26） 戦史上初の都市無差別爆撃

ゲルニカには軍と軍需工場があり、退却用の橋梁もあり、軍事目標に分類していた。

(3) 独軍のロンドン爆撃(1940/9/7～1941/5/10)

(4) 米軍・連合軍のドレスデン空襲(1945/2/13～15)

(5) 米軍の東京大空襲(1945/3/10)や本土空襲、広島・長崎への原爆投下

3 若干のコメント

(1) 戦略爆撃で戦略（作戦）目的を達成した事例は未だなく、重慶爆撃も同じだ。然し、蒋介石は、その日記に相当追い込まれたと感じていたと書いているという。

(2) 極東軍事裁判で、連合国は重慶爆撃問題を取り上げることはなかった。これは、米軍の日本空襲等が問題視されることを恐れたのだろう。何とも都合主義だ。

(3) 重慶は防守都市だったのか否か？

重慶市街地内や周辺には高射砲陣地も構築され、高度数千メートルの高度からの爆撃する日本爆撃隊にとっても安全な攻撃でも簡単な攻撃でもなかった。また、護衛の長距離戦闘機もなく、夜間攻撃主体ともなり、それが無差別爆撃に繋がった原因であるとの指摘もある。

(4) 巧みな宣伝戦により日本非難が強まった。防空壕での事故写真等の流布等

(5) 爆撃目標を軍事目標に限定するのは当時の軍事技術では無理だろう。否現代でもその難しさは同じかもしれぬ。

(了)